

メルマガ 「いいテク・ニュース」 季語に遊ぶ 2024年9月26日 (Vol.185)

長月、神無月に観たい北斎の「富嶽三十六景」と俳句

長月、神無月に観たい北斎の「富嶽三十六景」と俳句



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Great_Wave_off_Kanagawa.jpg

富嶽三十六景 神奈川沖浪裏 (かながわおきなみうら)

めぐりくる季節に合う名画と俳句、今年は葛飾北斎（かつしかほくさい）（1760～1849）の代表作で、日本美術の歴史を語る上で欠かすことのできない傑作として、国内外の人々に広く愛されている「富嶽三十六景」を紹介しています。
今回はその五回目として長月、神無月に観たい作品と俳句です。

19世紀後半のヨーロッパ芸術界を席卷した「ジャポニズム」。
その火付け役となったのは、日本からフランスに輸出された陶磁器を包む緩衝材として使われていた「北斎漫画」だと伝えられています。
これがある芸術家の目にとまり、そのデッサン力と多くのモチーフをいくつものパターンで表現する発想力に驚き、それがきっかけで、北斎や広重を筆頭とする日本の浮世絵など彼らの芸術作品が注目を集め、瞬く間にヨーロッパ中に広がって行きました。

フィンセント・ファン・ゴッホ、エドゥアール・マネ、エドガー・ドガをはじめ印象派の名画家たちが心酔し、天才ガラス工芸家エミール・ガレなど工芸の世界で活躍する芸術家たちも北斎や広重の作品の影響を色濃く受けました。

2020年、日本のパスポートが28年ぶりにリニューアルされ、査証ページの背景に「富嶽三十六景」の作品が敷かれるようになりました。
また、今年七月に発行された新千円札の裏面に「神奈川沖浪裏」が採用されています。
まさに今、注目されている「富嶽三十六景」のうち長月、神無月に観たい作品と俳句をお楽しみ下さい。

1. 富嶽三十六景 一 神奈川沖浪裏 (かながわおきなみうら)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:The_Great_Wave_off_Kanagawa.jpg

「山下白雨」、「凱風快晴」とともに「富嶽三十六景」シリーズの三役と称される作品。北斎の代表作であることはもちろん、世界で最も知られている日本絵画の一つです。海外では”The Great Wave”と呼ばれ、ゴッホをはじめ後期印象派の多くのヨーロッパの芸術家に影響を与えました。

また、作曲家ドビュッシーは自室にこの作品を飾って作曲をし、交響詩『海』の楽譜の表紙に、「神奈川沖浪裏」を描いています。

神奈川沖とは、現在の横浜市神奈川区神奈川本町付近にあった神奈川湊の沖合付近と考えられ、そこから望む富士を描いたとされています。

荒波の中を突き進む三艘の船は「押送船（おしおくりぶね）」と呼ばれていました。伊豆や房総で獲れた鮮魚を江戸の市中まで高速で運んだ小型荷船です。船の後尾には八人の漕ぎ手が四人ずつ背を向け合って漕いでいます。

北斎は、低い位置から見上げるような構図で、山のように高く盛り上がった巨大な波が、今まさに崩れ落ちようとする一歩手前の瞬間を描いています。

押送船の漕ぎ手たちに為す術はなく、大自然の凶暴さに身を任せるだけです。大波の彼方には、雪をかぶった富士山の姿が見えます。絵を見る者に自分も海面を漂い、大波を見上げ、富士の姿を垣間見ているような感覚を抱かせます。

荒れ狂う大波と鎮座する富士という、北斎の仕掛けた動と静、遠と近のダイナミックな対比が味わえる本シリーズの最高傑作です。

南の海で大きな台風が発生したとき、太平洋沿岸に寄せてくる高波を土用波といいます。夏の土用のころ（立秋前の十八日間）に見られるので、この名があります。実際には、台風のシーズンである九月に多い現象です。

この作品では、空が晴れているのに海が嵐のように荒れていますので、土用波の影響ととらえ、ここでは、晩夏の季語、「土用波」を詠んだ句を選びました。

土用波一角崩れ総崩れ

本井 英

押し上げてなほ押しあぐる土用波

島倉みつる

2. 富嶽三十六景 十四 甲州石班沢 (こうしゅうかじかざわ)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Kajikazawa_in_Kai_province.jpg

甲州石斑沢とは、甲州盆地を流れる笛吹川（ふえふきがわ）と釜無川（かまなしがわ）が合流する富士川の近くに面していた鰍沢（かじかざわ）という場所で、現在の山梨県南巨摩郡富士川町あたりです。

タイトルは鰍の別名が「石斑魚（いしぶし）」であることから、北斎さん、鰍沢を「石斑沢」と書こうとしたところ、誤って「石斑魚」と書いてしまったようです。

富士川は球磨川（くまがわ）、最上川と並んで日本三大急流の一つで、流れの激しい川です。

遠景を霞の中に浮かぶ富士をぼかして、中景は川の流れを簡略化した曲線で、そして近景は泡立つ急流を緻密な点描で描いています。

霧がかかる中、荒々しい川波にえぐられた岩場の突端に立ち、投網（とあみ）を放つ漁師とかたわらで魚籠（びく）を持って腰掛けている子供が描かれています。

漁師を頂点として、彼が手繰（たぐ）る投網と川に突き出た岩場の斜面が三角形を作り出し、これが富士山の稜線の三角形と相似形となり、美しい構図になっています。

描写を藍の濃淡と淡い桃色で表現した傑作で、海外での人気も高い作品です。

鰍は水が澄んで底に小石がある川に棲み、石に張りつくので、石伏（いしぶし）とも石斑魚とも呼ばれ、他にも呼び名は各地で様々あります。見た目は不細工ですが、食べると美味です。

ここでは、タイトルの「鰍」を詠んだ句を選びました。
三秋の季語になります。

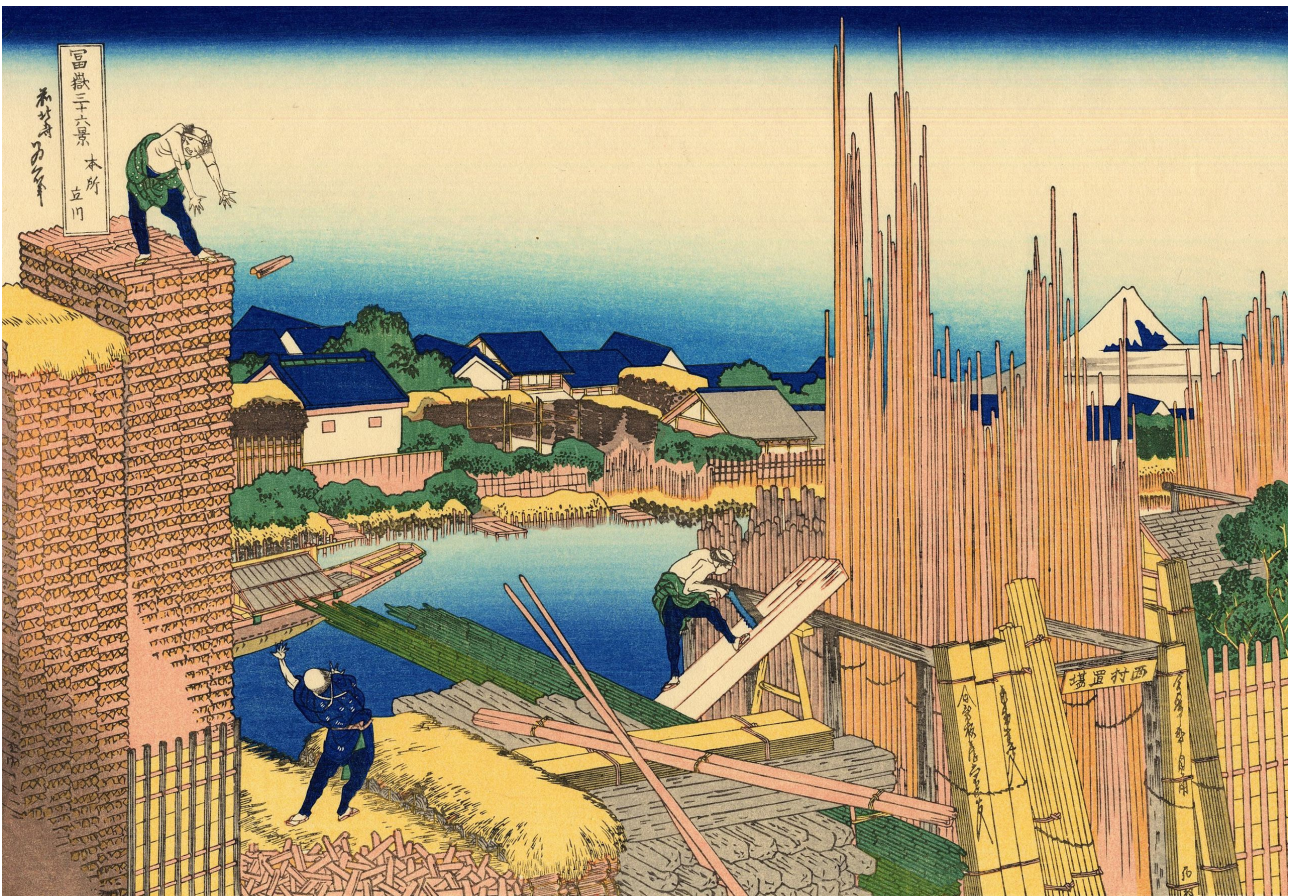
鰍鳴く月の山川狩られけり

小林一茶

鰍とは知らず身振りをして示す

茨木和夫

3. 富嶽三十六景 四十二 本所立川 (ほんじょたてかわ)



https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Honjo_Tatekawa,_the_timberyard_at_Honjo.jpg

隅田川の東岸に位置する本所は現在の東京都墨田区の南側周辺の地域を指し、北斎が生まれ育った場所でもあります。

その南を流れる立川（竪川）は隅田川と中川を結んで作られた運河で、材木の一大集積地である深川の木場を控え、川沿いに材木問屋が軒を連ねていました。本図はその木材置き場の風景です。

画面の右奥に富士山が見えることから、立川の北岸側から西南の方角を眺めていることとなります。

画面左側では、職人が塔のように高く積み上げられた材木の上で、下の職人が投げ上げた薪を受け取り、その薪を一つ一つ隙間なく積み重ねています。

また、画面右側では大きな角材に鋸（のこぎり）を立てている職人がいます。画面に動きをもたらすため、北斎はこのように働く人物たちを他の作品でも好んで描いています。

また、この作品は幾何学的な構図を好んだ北斎の個性が発揮されている作品でもあります。縦方向の直線を強調した木材を手前に配し、その先に富士山が垣間見えることで空間の広がりをもたらし、木材の直線と富士山の三角形を対比させています。無数の材木を描いた緻密な描写と、それに対応した影（ほ）りや摺（す）りが圧巻の出来栄です。

右下の札や材木には「新板三拾六不二仕入」「永寿堂仕入」「西村置場」「馬喰丁弍丁目角」など版元の西村屋が「富嶽三十六景」の新作を出したという宣伝文句もちゃっかり入れています。

ここでは、木材を貯めておく場所、材木問屋が集まっている地域という意味の「木場（きば）」＋秋の季語を詠んだ句を選びました。

木の香り強くて木場の水澄めり

遠藤若狭男

季語「水澄む」で三秋

夜の木場の筏（いかだ）溜まりや秋しぐれ

星野麥丘人

季語「秋しぐれ」で晩秋

「神奈川沖浪裏」から、私も一句詠んでみました。

ボード立て悔しげに見る土用波

白井芳雄

全体を通じての参考文献、出典：編者 日野原健司

『北斎 富嶽三十六景』(岩波書店) (2020年)

ISBN978-4-00-335811-5

監修・著者 久保田巖

『北斎と廣重一美と技術の継承と革新』(リックテレコム) (2022年)

ISBN978-4-86594-314-6

著者 奥田敦子

『THE 北斎 富嶽三十六景 ART BOX』(講談社) (2020年)

ISBN978-4-06-519949-7

監修・著者 狩野博幸

『葛飾北斎名作 100 選』(宝島社) (2023年)

ISBN978-4-299-04727-4

監修 永田生慈

『もっと知りたい葛飾北斎 生涯と作品 改訂版』(東京美術) (2022年)

ISBN978-4-8087-1141-2 C0071

飯田龍太・稲畑汀子・金子兜太・沢木欣一監修

『カラー版 新日本大歳時記 愛蔵版』(講談社) (2008年)

ISBN978-4-06-128972-7

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 春』(KADOKAWA) (2022年)

ISBN978-4-04-400504-7 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 夏』(KADOKAWA) (2022年)

ISBN978-4-04-400499-6 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 秋』(KADOKAWA) (2022年)

ISBN978-4-04-400500-9 C0392

茨木和生・宇多喜代子・片山由美子・高野ムツオ・長谷川權・堀切実編集委員

『新版 角川俳句大歳時記 冬』(KADOKAWA) (2022年)

ISBN978-4-04-400502-3 C0392

参考サイト：フリー百科事典ウィキペディア (Wikipedia)

最後までお読みいただきありがとうございました。

(株)技術情報センター メルマガ担当 白井芳雄

本メールマガジンのご感想や本メールマガジンへのご意見・ご要望等 melmaga@tic-co.com まで、
どしどしお寄せ下さい。

株式会社 技術情報センター 〒 530-0038 大阪市北区紅梅町 2-18 南森町共同ビル 3 F TEL : 06-6358-0141 FAX : 06-6358-0134 E-mail : info@tic-co.com
